

## カントにおける未来概念と非歴史性批判に対する応答

八木 緑(関西学院大学)

「カントは未来を予言しない。それは人智にとって本質的に不可能なことである」(小倉志洋『カントの倫理思想』、東京大学出版会、1972年、338頁)。確かに認識の限界を人間の可能的経験の範囲内に定めるカントの理論哲学において、いまだ経験されざる未来に関する事柄はわれわれにとって原理的に不可知なものである。それゆえカントが未来について語らないというのは、単に人間の認識能力の有限性を考慮するがゆえのある種の謙虚さの表れとも言えるかもしれない。しかしながらカント哲学において未来への言及が少ないのは、ただそうした控えめな哲学的態度によるだけでなく、そもそも将来的なものへの不安や期待といったものが人間の生にとってもつ意味をカントが軽視していることに由来するとも考えられるのではないかと。というも、カントにおいて未来が取り上げられる際、主としてそれは「来世(das zukünftige Leben)」のような理念としての未来であり、現に生きるわれわれの「今、ここ」とは根本的に切り離された彼岸的なものとして登場するにすぎないからである。

このような見解に対してはただちに次のような反論がなされよう。まずカントは、理論哲学においては未来をわれわれの認識能力を超え出るものとして消極的に扱っているが、実践哲学においては最高善の実現のために要請される必然的対象として、積極的な位置づけを与えている。『実践理性批判』では、未来における人間の道徳的完成を目指すことは、純粋実践理性の原理、すなわち道徳法則に従って要求される義務であることが主張される。その際、来世は単なる思弁において想定されるものではなく、われわれの実践を通して、行為が実際になされる現世と結びつく。漸進的な道徳的発展を重視していることにも表れているように、カントは啓蒙主義の哲学者である。『啓蒙とは何か』では、カントは次世代の人々が自分の悟性を自由に使用することができないような状況を作り出すことを「人間の本性に対する犯罪」と呼んで厳しく非難する。カントにとって啓蒙は常に未来の世代も含む人類全体の進歩であり、それゆえ、この歩みを妨げることは人類の未来を蔑ろにすることを意味する。こうした議論を踏まえれば、カントほど未来を重んじる哲学者は存在しないと断言しても過言ではない。

しかし、それでもやはり、カントの未来概念は義務を果たした先に展望されるおぼろげな理想郷を表すものでしかなく、われわれが日常の中で感じている未来への切実な懸念を受け止めうるものではない、との批判は避けがたいように思われる。カントは魂の不死を要請するという仕方由来世の理念に積極的な意義を認めるが、それが意志の規定根拠となることには決して首肯しない。言い換えれば、カントは未来の予期から現在の行為を決定することをそもそも道徳的善の契機として受け入れないのである。周知のように、『人倫の形而上学の基礎づけ』においてカントは、行為の結果に対する期待によってではなく、道徳法則に基づいて意志を規定すべきことを主張している。ヘーゲルの批判に始まってこれまで再三にわたり指摘されてきたように、それは「義務のための義務」であり、行為することで何が生じるのかというわれわれ人間にとって当然の疑問さえも冷淡に撥ねつける立場であるようにも見える。

さらに、未来というものが話題とされて然るべき歴史哲学の文脈においても、カントがこの概念にそれほど真剣に取り組んでいるようには思われない。たとえば『世界市民的見地における普遍史の理念』におけるカントの歴史観は、明らかに目的論的な視座の上に成り立つものである。その中で彼は、個々人にとっては混乱して見える数々の出来事も、人類全体という規模で俯瞰的に見れば規則的な発展の過程を構成していると述べる。個々人が利己的に行為していることも、実は「自然の意図」の導き

に従っており、人間においては理性を頂点とするさまざまな自然的素質が展開されていく諸段階に位置づけられるというのである。このような言説には誰もが楽観的な進歩主義の傾向を見て取るだろう。

それならばカントは、われわれは自然の意図によっておのずと導かれる存在者として、経験的に認識できない未来のことについてはあれこれと思考を巡らせても仕方がなく、ただ今なすべき行為をなすことだけを中心に掛けていけばよいと考えているのだろうか。そうではないことは、たとえば『人類の歴史の憶測的始源』において、人間が未来のことに思いを致す能力をもつようになったことが、人類の進化における重要な局面として語られていることから明らかである。しかもその際にカントは、来世のような遙か遠くに隔たった未来のことではなく、人間が現在営む生活に直接に関わってくるような近い未来のことを念頭に置いている。未来の不確かさゆえに不安や憂鬱を覚えるといったことは、カントにとって理性的存在者というものを理解する上で欠くことのできない性質である。それゆえ、カントが現実の具体的状況から予期される未来について十分な量の考察を残していないことは事実であるとしても、現在と地続きの未来に対して無関心であるとか、あるいは人間が未来に関心をもつことそれ自体を無価値と見なしているといった解釈は誤りであると言わねばならない。

従来、カントの哲学は、人間が現実において具体的に進行していく時間の中で行為するというきわめて当たり前の事実すら無視した非歴史的な立場と見なされてきた。彼の哲学体系の主要な部分において、認識や行為の主体の能力が特に普遍性や形式性に注目して分析されているところでは、確かに時間を超越した理性的存在者一般が想定されている。しかしこのことは、各々の人間が常に特定の場、特定の時代の中で存在していることを無視するものではない。本稿は、カントをヘーゲルの歴史主義的立場との対比において解釈し批判するという、現代でも根強い見解を再検討するため、啓蒙思想をカント哲学の基本的構想として捉えることにおいて特に未来概念に着目しつつ、カント哲学における歴史性を解明することを目指す。